

## 自分の人生をどう切り拓くか ～新しいことにチャレンジしよう～



校長 田邊 泰

コップの中に水が半分あります。皆さんはどう考えますか？

この「コップの水」について、アメリカの大学で教鞭をとったP・F・ドラッカー氏は、「コップの水が『もう半分しかない』から、『まだ半分ある』に変わった時にイノベーション(それまでのモノやシステムなどに対して、全く新しい技術や考え方を取り入れて、社会に大きな変化を起こすこと)が生まれる。」と言っていたそうです。つまり「まだ半分ある」と考えることで、「主体性」「チャレンジ精神」「責任感」「問題解決能力」などが生まれ、そのことによって行動が変わり、成功につながる、という考えです。

一方で、こんな調査結果があります。それは「もう半分しかない」と考えた人の方が、学業成績が良いということです。「もう半分しかない」と思う人の方が将来に備えてより準備をしておこうとする傾向が高いからのようです。

さて、一般的に日本人は「もう半分しかない」派の方が多いようです。それは、セロトニンというホルモンが関係していると言われていています。セロトニンは、精神の安定や安心や平常心などに関わる脳内物質で、「幸せホルモン」とも呼ばれています。私たちの人間には、セロトニンを多く作り出そうとする遺伝子Lと、セロトニンを少なくしようとする遺伝子Sがありますが、日本人の65%が遺伝子Sを2つ持つSS型(不安を感じやすく緊張しやすい)で、遺伝子Lを2つ持つLL型(不安を感じにくく人前でもあがらない)の人はたった3%なのだそうです。

逆にアメリカ人はLL型が32%(日本人の10倍)で、SS型はわずか18%(日本人の3分の1以下)だそうです。つまり、日本人は比較的、楽観的に物事を見ることが苦手で、焦る気持ちが強く不安を抱えやすい一方、モチベーションを高く持ち、努力したり工夫したりできる人が多いのだ、と言えそうです。

このことは、長い間の進化の過程でそうなったのであって、どちらの方が優れている？という話ではありません。災害大国である日本で生き抜くためには慎重かつ思慮深さが必要だったかもしれません。一方でアメリカ人は不安を乗り越えて、新しいことに楽観的にどんどんチャレンジする必要があったのでしょう。「日本になぜスティーブ・ジョブズがいないのか？」という人がいますが、それはこういうことも一つの要因と言われていています。

とはいえ、これからの国際社会で生き抜くためには、失敗を恐れない楽観性とチャレンジ精神も必要だと思います。日本人の美德である慎重さや思慮深さはそのままにしながらも、これからの国際社会で生き抜いていくために必要なスキルを身に付けるべく意識して生活してみませんか？ 進学、進級したばかりですので、まずは、その第一歩として、新しい友人をつくったり、読んだことのない本を読んでみたり、何か新しいことにチャレンジしてみましよう。

